

# NEWS

## 2003.8 ~ 2003.10



印象主義も登場する最終セクション

## 「ヴィクトリアン・ヌード」展の意義

世界的に有名なロンドンのテイト・ブリテン企画の世界巡回展「ヴィクトリアン・ヌード」展が、五月二十四日から八月三十一日まで本学大学美術館において開催された。産業革命により、未曾有の経済的繁栄を誇ったヴィクトリア女王時代（一八三七―一九一）のイギリス社会で、裸体画が道徳的観点から

の批判を受けながらも、芸術として成熟し、発展していった過程を明らかにした。芸大ならではの企画と賞賛された一方で、写真、映像も紹介したことに対する賛否両論のなか、全般的には概ね好意をもって受け入れられた。期間中の入場者数は約九万人。

## 「ヴィクトリアン・ヌード」

### 19世紀英国のモラルと芸術」展を終えて

小野寺玲子

この展覧会は、大学美術館の展示室1、2、3を用い、油彩画を中心としながら素描、写真、そして珍しい二世紀初頭の短編映画を含む九十九点を展示して、英国ヴィクトリア朝における裸体芸術開花の様相を知ることができるとした。この企画は英国近代美術の

蒐集で有名なロンドンのテイト美術館が立案し、ロンドンからミュンヘン、ニューヨークへと巡回したものである。日本では東京に先んじて二月初旬にかけて神戸市立博物館で開催されたが、日本展の構成と図録編集は芸大美術館に任された。

## 交流

### ウズベキスタン 芸術アカデミー交流 記念写真展開催

本学とウズベキスタン芸術アカデミーとの交流を記念した写真展「Uzdes of Great Silk Road」が、七月二十九日〜八月八日まで、大学美術館陳列館において開催された。写真（二点）は、同アカデミーの総裁が、シルクロードの各地を旅行した際に撮影したもので、同氏から本学に寄贈されたものを展示した。



### 大学等地域開放特別事業、 二事業を開催、成果を展示

第二回「夏休み親子で漆芸体験」漆を金と貝で飾る」作品展が、十月十日から六日間、とりでアートギャラリー（茨城県取手市）において開催された。小学一・三年生が、漆を金と貝で飾って制作した絵画作品を、保護者の作品と一緒に展示公開した。この体験講座は、本学取手校地塗装造形工房が、平成十五年大学等地域開放特別事業として八月に実施したもの。

また、七月二十八日から五日間、小学四・五・六年生を対象に、本学芸術情報センター内施設で本学教官と大学院生の指導により、「第二回大型CGプリント制作実習」コンピュータで大きな絵を描こう」が行われ、八月には自分たちよりも大きなサイズのプリント（A1・A2・A3）に出力した作品を学内施設で一般公開した。現在は本学の芸術情報センターホームページ（<http://www.geidai.ac.jp/anc/>）において公開中。

### 平成十五年度公開講座、 今年も好評のうちに終了

東京芸術大学公開講座は、本学がもっている専門的・総合的な芸術教育機能を活用し、広く社会に学習の機会を提供しているもので、七月から九月にかけて、上野校地で「陶芸教養講座」「お筆を楽しく」など十六講座、取手校地では「ステンドグラス」など四講座を開講した。本学の公開講座は人気が高く、募集開始前から多くの問い合わせがあり、六講座では定員をオーバーし、実技講座という性格上、やむなく抽選を行った。

## 運営

### 伝統音楽研修会を開催、 成果の発表は奏楽堂

八月二十日、文部科学省、東京芸術大学共催による平成十五年度伝統音楽研修会の実技研修が、本学音楽学部邦楽科教官を講師として音楽学部校舎において行われた。五種類の和楽器のグループに分かれ、研修の最後には、奏楽堂において合同演奏による成果の発表が行われた。「伝統音楽研修会」は、学習指導要領における伝統音楽に関する教育が円滑に実



内覧会風景



「ヴィクトリアン・ヌード」展ポスター

#### テイトブリテン発世界巡回展

「ヴィクトリアン・ヌード」19世紀英国のモラルと芸術

Morality and Art in 19th-century Britain

主催：東京芸術大学 / 毎日新聞社

後援：外務省 / フリティッシュ・カウンシル

協力：JAL / 日本通運 協賛：ユニシティ ネットワークジャパン（株）

ヌード自体は芸術において伝統的テーマであるが、これを展覧会のテーマとして正面に据え、写真や映画といった当時の先端メディアであるとともにいわゆる「ハイ・アート」外の領域も視野に入れた取り組みは、先鋭的といつてよい。テイト美術館と芸大美術館との仲をとりもつたのは毎日新聞社であるが、この大胆な企画を招来した慧眼と英断に敬意を表したい。また、ロンドンでもまだ準備中の段階でテイトの立案者本人と接触する機会を得たことも幸運であつた。世界巡回展といつてもすべて同じ作品を輸送・展示するのは叶わないのが普通である。その点、日本における出品リストについて早くから直接交渉することで、質の高い作品を確保するとともに日本の観客にとって理解しやすい構成にすることができた。人によってジェンダーや帝国主義

義などさまざまな問題を意識しながら見ることもできる、有意義な内容であつたと思う。国際的に一流の美術館との共同作業は、美術館スタッフにとって学ぶことの多い貴重な機会であるだけでなく、世界に芸大を認知してもらつた好機でもある。撤収作業立ち会いのため来日していたテイトのスタッフたちは、芸術祭の御輿が日々できあがっていく様子を興味深げに観察していたし、気に入つて持つていった芸術祭ポスターが、テイト館内のどこかに貼られているかと想像するのも愉快である。こうした経験を積み重ねることで、美術館として研究および成果発表の実力を磨いていきたいものである。コレクションの歴史の古さでは、ヴィクトリア朝に成立したテイト美術館に決してひけをとらないのだから。（おのでら・れいこ / 大学美術館助手）

施されるよつ全国の教育委員会指導主事や指導的立場にある音楽教員を対象として実施しており、本学が実技研修を担当したもの。



#### 『藝大21』アジア音楽祭 2003 in 東京を招致

本学演奏芸術センター主催の新企画『藝大21』では、アジアの音楽の独自性と可能性にフォーカスを合わせ、『アジア音楽祭2003 in 東京』を本学に招致した。九月十八日に講義室、第六ホールを利用し、台湾の作曲家、周文中氏による基調講演、アジアを代表する作曲家たちにより、音楽の独自性について討論が行われ、アジア各国の音大生の作品が発表された。また、本学音楽堂において芸大フィルハーモニアによる「アジアの協奏曲」が開催され、アジアの民族楽器とオーケストラの共演の醍醐味溢れる演奏会となった。

『アジア音楽祭2003 in 東京』は文化庁国際交流事業の一環として、アジアの創作の現在・過去・未来、欧州の音楽家との交流などを縦横にからませ、「アジアの伝統と現代の融合」をテーマに九月十七日から二十三日まで演奏会や講演会が都内で開かれた。二カ国一五人

の作曲家が参加、六人の海外演奏家が来日。

#### 大学美術館収蔵品 データベース公開中

東京芸術大学ではその収蔵品を、教育・研究のための資料として「芸術資料」と呼んでおり、現在に至るまでこの目的にそつて行われてきた収集によつて、今日では指定物件（国宝・重要文化財）四一点を含む、約四万五一点という日本有数のコレクションが形成されています。今年の三月三十一日、本学の大学美術館ホームページ <http://www.geidai.ac.jp/museum/> に、二万四五一件の作品情報、二二一件の画像を試験的に公開し、九月末までの六カ月間に約一万一件のアクセスがあつた。今後、随時、公開情報を増やしていく予定。

#### アートインスペース 宇宙開発事業団との共同研究成果発表

十月十八日、本学美術学部絵画棟石膏室において、東京芸術大学・宇宙開発事業団との共同研究「アートインスペース」地球・人間・宇宙に向けた芸術の新たな視座の成果発表が行われた。当日は研究発表のあと、宇宙飛行士向井千秋氏を迎え、シンポジウムが行われた。この研究は、本学十七名、事業団五名の体制により、創作活動などの芸術の視点から、国際宇宙ステーションを人文社会学的観点から利用し、人類が新たな自然観・人間観・世界観を共有する契機になることの可能性について、平成十一年から三年間にわたり「宇宙茶室」を始めとした五つのプロジェクトにより追究した。